

1. 「取り残し」「置き去り」「閉じ込め」を防ぐ大切さ

子どもを部屋やトイレ、園庭に取り残した。～しそうになった

子どもを公園に置き去りにして帰園した。～しそうになった

子どもを（自身では開けられない／開けにくい場所に）閉じ込めた。～しそうになった

→ あなたの園でも、間違いなく起きていることです。「気づいたんだから、大丈夫」？
いいえ、ニアミス (※) も深刻と考えるべき

この状況で長時間、経ってしまったら？

長時間でなくとも、水、暑熱、高さなどのハザード (※) が加わったら？

- ・「息ができないハザード（危なさ）」があったら…？ （2016 年、福岡市）
- ・熱中症の条件（気温、湿度）があったら…？ （2005 年、上尾市）
- ・子どもが部屋やトイレの窓を開けて、その場からなんとかして出ようとしたら…？

※ハザードとリスクの正しい定義、ヒヤリハットとニアミスの違いは、
『子どもの「命」の守り方』（エイデル研究所）

【誰もいないことを、声出し指差し行動で確認する】

なぜ、声出し指差し確認？：「保育の安全」（検索）→「安全」→2－3

「誰がいる？」はダメ。子どもはどこでも眠り込みます。

★閉める時には、誰もいないことを声出し指差し確認する

★通りがかりに「ドアが開いている」と気づいたら、むやみに閉めない。一度開けて、誰もいないと声出し指差し確認をしてから閉める

（子どもが自分でトイレに行くこともある。おとなを資材庫に閉じ込めた事例も）

★トイレや園バスのような狭い、閉じた場所ならば確認は容易。一方、園庭や部屋、ホールは広く、子どもが隠れる場所もあるので困難

- ・見る方向に指（手）を向けて、「誰もいない！」「誰もいない！」
- ・バスは一番後ろから全席。代車のおとな用バスは、座席の下も「誰もいない！」
- ・心配なら、もう1人が同じ行動。ただし、2人でしてはいけない
（しゃべってしまう。「〇〇さんが見てくれているだろう」が起こる）
- ・オマケ：人感センサーのブザーを車内に付け、ドアの鍵を閉めたらセンサーがオンになるようにしておく（商品化？）

【それでも起こるから…指差し声出し行動で人数確認】

- ✕ 「1 時間に一度」「30 分に一度」 ← 形骸化した安全確認は無意味
- 先生が理由を理解して、「今、ここでは人数確認をする」
 - ・移動する前と後で、人数が合っているか
 - 散歩時。園庭遊び後等
 - 移動前の人数が不明なら人数確認は無意味＝登降園時。災害発生時等
 - ・「トイレに行く」と言った子どもが帰ってきているか
- ✕ 子どもの名前を呼んで点呼 ← 返事をしない。別の子の時に返事をする
時間がかかる。先生がいらだつ
(点呼の練習をしたいなら、場を別に設定)
- 先生が声出し指差しで、さっさと数える

【それでも起こるから…「あれ？ 誰かいなくない？」】

- ★未就学児施設で働く人にとって重要な適性(≡もともと持っているもの ※)のひとつは、
「なにかおかしい(ことになりそうだぞ)」と気づく力があること。問題解決ができるかどうかではなく、「おかしい」と気づくこと(米国労働省とノース・カロライナ州商務部による詳細な全職業分類サイトから)
- ★子どもは自分で異常を察知できない、伝えられない(難しい)のだから、当然。「気にしない」人にできる仕事ではない
 - ・(朝)「Aちゃん、なんか今日、元気ないね」
 - ・(睡眠チェック中)「Bちゃん、いつもより汗かいてるよ。熱が上がるかな」
 - ・(室内遊び中)「あれ？ Cちゃん、さっきここにいたけど…どこ？ あ、いた(^^)」
 - ・(公園へ行って、まず先生が一周)「なんか、ベンチの上で光ってるよ。なんだろう。うわ、カミソリの刃！」(実話。ナタが落ちていた例も)

※適性(ability。例：運転適性検査)、知識や技術(学び、身につけるもの)、スキル(知識や技術を使う応用力)、コンピテンシー(前述のすべてプラスいろいろを活かして仕事を成功裡に進める力)…… 欧米の職業システムでは詳細に定義され、厳格な適材適所が行われる(いわゆる「ジョブ型雇用」)。一方、日本は「慣れれば誰でもたいていの仕事はできるようになる」という認識がいまだに強い。さて、保育士、教諭、調理師、看護師、施設長は？

【「おかしい」と思ったら声に出す、確認する】

他人の子どもの命を仕事として預かっている専門家として…

- × 「おかしい」に気づかない
- × 「おかしい」と思っても気にしない
- × 「おかしい」を口に出せない
- × (口に出せないとしても) 自分で確認しない
- × 「おかしい」「確認しましょう」と言っている人に、
根拠なく「大丈夫」「心配しすぎ」などと言う
- × 子どもの命や自分たちの責任よりも、「職場の和」を優先させる
(「どうしたら和気あいあいと仲良く仕事ができますか?」というお尋ねの多さ!)
- × 子どもの命や自分たちの責任よりも、立場や年齢の上下を優先させる
- × 子どもの命や自分たちの責任よりも、保護者への過度なサービスや、「保護者から責められないこと」を優先させる

(この項についてだけで2時間の研修会になってしまうので、略)

参考:「保育の安全」(検索)→「安全」→2-4

『保育者のための 心の仕組みを知る本』、『子どもの命の守り方』

全私保連『保育通信』10月号の連載記事

だから、チェック・ポイントは複数!

誰かが気づけばよい

うっかり、ぼんやり、忘れる、間違える
=人間の脳。

★忘れた人は忘れたことに気づかない

★間違えた人は間違えたことに気づかない

★ぼんやりしている人は、ぼんやりしていることに気づかない

【気づいた時こそ、チャンス!】

★人間のミス(ヒューマン・エラー)の連続で起こるできごと:

取り残し、置き去り以外にも、アレルギー食の誤食、～し忘れ、～し間違いなど

★最終的な結果まで行ってしまったら、何がどこが問題だったかはわからない

「公園に置き去りにした子どもを近隣の人が連れてきてくれた」「アレルギー食材を誤食した」「薬を間違えて飲ませた」「施錠忘れに明朝まで気づかなかった」など

→ 反省はできても、改善には役立たない!

★途中で気づけた時、止められた時こそ、チェック方法(の流れ)が機能しているかどうか
を確認するチャンスです!!

× 「気づけた」のは、偶然、運がよかったから
→ 運がなくても気づけるチェック方法の流れに!

○ そこで気づくよう、ルールがあったから気づいた

○ 今回は運がよかった。でも、その運(偶然)がなかったとしても、気づくようなルールはその後にあったから、気づけたはず

2. 園バス運用の課題（取り残しとは別の問題として）

- ★安全を保障するという点で、今回の「指針」は合理的
- ★「理にかなっているのだから皆ができるはず」と言うなら、健康心理学者は不要…

課題となる点

- ・送迎困難な保護者を対象にしたものから、保護者全体に対する「サービス」に変化
- ・やめることは困難（特に、子どもが減っている地域）
- ・実質に見合わない料金で運用してきた場合、今さら値上げできない
(送迎困難な保護者の中には、もともと払えない人もいるだろう)
- ・しかし、補助金はない
- ・添乗員を務める職員の配置基準がそもそも少なすぎる。朝夕は特に手が必要
(朝晩は非正規でよい？ 朝晩こそ、保護者と重要な情報交換をするのに！)
- ・運転手以外に添乗員が必要なのは重々理解しても、実際、添乗員を乗せられるか？
- ・配置は最低限。でも、「すべきことは最大限しろ。福祉なのだから」が国の論理。それで子どもを安全に（長時間）預かり、子どもの成長発達を保障できるのか？
(例：新潟県は県単予算で1歳児3対1の配置をずっと続けてきた。県がすること？)

- ★「県からこのような指針が出ました。料金を実費レベルに値上げします」と地域の園で保護者に伝える。それでも安いままに設定するなら、「安かろう悪かろう」というメッセージになる

- ・送迎困難だが実費を払えない保護者は？
- ・「じゃあ、園バスを使わない」という保護者が増えても、バス自体は走らせなければならぬ → 経費はかかり、実費の頭割り額は大きくなる悪循環

- ★都市部で運用されている「サテライト方式」の応用版は？

サテライト方式：保護者が駅横等のサテライト保育室で送迎。自治体のバスがサテライトと各園をつなぐ

- ・バスのルートが重複する園でバスを共同運行する（自治体も支援）
- ・利用料はプール方式
- ・車両、燃料費、駐車場スペース、人件費等を削減、圧縮できる（＝料金も）
- ・バス運行の園グループに入ったほうが、園運営には得策

- ★事故で「園バスの安全な運用」に保護者の意識が向いている今こそ、変えるチャンス！
今からスタートすれば、4月に共同運行開始も可能